

vol. 2221

【発行】大分県高等学校教職員組合教宣部 大分市大字下郡496-38 大分県教育会館
TEL / (097) 556-2838 FAX / (097) 556-8998 MAIL / ohtwu@view.ocn.ne.jp

大分県高教組情報

【発行者】大野 真二 【印刷】佐伯印刷(株) 【売 価】30円(組合員の購読料は組合費の中に含んで徴収しています)



今号の掲載内容 (掲載順)

- 子どものゆたかな学びと学校における働き方改革を求めて
—日教組第69次教育研究全国集会広島大会

子どものゆたかな学びと学校における働き方改革を求めて 日教組第69次教育研究全国集会広島大会 と き：2020年1月24日(金)～26日(日) ところ：広島県広島市

日教組の第69次全国教研は広島県広島市にて開催され、全国からのべ約9,000名が参加し、実践の交流と様々な教育課題に関する議論が3日間にわたって行われました。大分高教組からはリポーター5人、司会者2人、一般参加者(青年層)2人、本部2人の計11人で参加しました。



全体集会では、岡島真砂樹中央執行委員長が主催者を代表してあいさつし、「主体的な学びとは、お互いを認め合う人間関係、子どもの思いや考え、学ぶ意義や楽しさなどが基盤となるものと考えます。土台がしっかりしていない中で、点数学力の柱をいくら立てたととしても、それは自ら学ぶ力にはつながらず、いわゆる砂上の楼閣となってしまいます。点数、能力、成果等の枠組みに縛られるのではな

く、子どもを中心に据えたゆたかな学びを創造する教育実践・教研活動につなげていかなければなりません。」と述べ、私たちの考えるゆたかな学びについて述べました。また、「常態化・深刻化した学校現場の長時間労働は、教職員のいのち・健康に関わる問題であるとともに、子どものゆたかな学びにも直結する待ったなしの課題です。昨年の臨時国会で給特法が改正され、上限ガイドラインが法的に位置づけられたことをうけ、大幅な業務削減、定数改善等、教職員が実感できる具体的な改善策を求めるとともに、長時間労働の元凶となっている給特法の廃止・抜本的見直しにむけさらにとりくみを強化していかなければなりません。」と指摘し、あわせて定数改善を含めた教育予算の拡充を求めました。その後、サヘル・ローズさんの「出会いこそ、生きる力」と題した記念講演が行われました。

全体集会終了後、24の分科会にわかれ、621本の教育実践レポートについて共同研究者とともに討議を深めました。そして、最終日には、それぞれの分科会の総括討論、アピールを確認し、全日程を終えました。

記念講演

演 題 「出会いこそ、生きる力」

サヘル・ローズさん

4歳の時に戦争の最中、孤児になりました。7歳の時に孤児院で今の母に引き取られ、8歳で来日してからは、小学校の校長先生だけではなく、給食のおばちゃん、駅員さん、スーパーの店員さんなど、私と母を心から愛してつながってくれる人、信頼して支えてくれる人に出会いました。そこには、国籍や宗教は関係ないのです。おかげでここまで人生を歩んでこれたのですが、残念ながらそういう方々だけではありませんでした。中学校では、心が粉々になるほど辛く死ぬことまで考える時期もありました。でも、母が必死に私を育ててくれたことに気づき、母のために生きることを自分の目標としました。そして、戦争で人生を狂わされた私

たちが助け合っていること、私の生きている意味を伝えたいと思うようになりました。

教職員の皆さん一人ひとりが子どもたちの人生の学びになります。家に居場所がない子どもがたくさんいます。学校は信頼できる場所に、そして皆さんは一人の人間として子どもたちに寄り添って、向き合っていてほしいと思います。皆さんが恩師として子どもの心に残る存在になっていただきたいです。

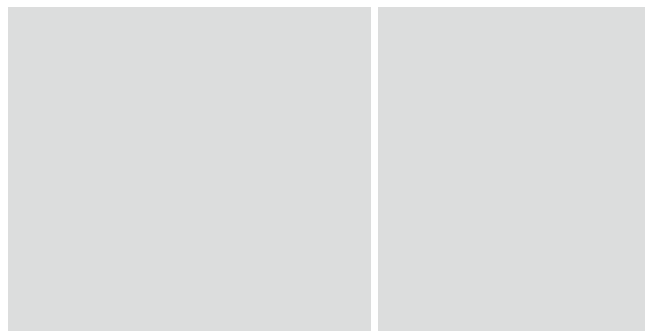
サヘル・ローズさん

1985年イラン生まれ。8歳で来日。日本語を小学校の校長先生から学ぶ。舞台『悲しき娼婦』では主演を務め、映画『西北西』や主演映画『冷たい床』は第6回ミラノ国際映画祭映画部門にて最優秀主演女優賞を受賞するなど映画や舞台、女優としても活動の幅を広げている。第9回若者力大賞を受賞。芸能活動以外にも、国際人権NGOの「すべての子どもに家庭を」の活動で親善大使を務めている。

日教組第69次全国教研 大分高教組リポート発表者

分科会名	リポーター（分会名）	リポートタイトル
外国語教育・活動	木村 辰郎（日田三隈）	「アクティブラーニング」を問い直す
自治的諸活動と生活指導	山田 憲昭（日田三隈）	日田三隈高校の主権者教育推進計画について
平和教育	佐藤 立也（日出総合）	「高校生1万人署名活動」大分でのとりくみを通して
メディア・リテラシー教育と文化活動	青木 美穂（佐伯鶴城）	探究学習と学校図書館の関わり
教育条件整備の運動	田畑 幸子（別府支援石垣原）	石垣原校の遠隔授業について

日教組第69次教育研究全国集会に参加して ～全国教研還流報告～



したが、現場の声をもち寄って行う実践の共有と交流の場は、やはりどんな研修にも勝ることを実感しました。

「よくわからないことが多すぎて」

一般参加・大林 幸誉（大分豊府）

大学入試の英語民間試験成績提供システム導入の延期、学習指導要領の改訂、小学校での英語の導入、またそれに伴って大幅に変わる中高の英語教育。どうすればこの黒船来航を乗り切れるか。そんな思いで全国教研に参加しました。

話題の中心は、校種間の連携の在り方やそのための情報交換や「主体的・対話的で深い学び」の実践報告でした。小学校や中学校での実践についての活発な協議の中で、まだまだ小中学校の英語教育に対する理解が足りないと感じました。今年については大学入試改革、つまり出口にしか意識が向いていませんでしたが、今回、どういうことを小中学校で学んで子どもたちは高校へ進学するのかということに理解を深める必要があることに気づかされました。この分科会で得た授業改善・小中高連携のとりくみ・実践を日頃の教育活動で生かしていきたいと思っています。

外国語教育

『やはり交流と共有はすばらしい』

リポーター・木村 辰郎（日田三隈）

外国語分科会のリポーターとして参加しました。自分はアクティブラーニング（主体的対話的で深い学び）に対する疑問点と課題を提起する内容の報告を行いました。具体的な実践を伴うリポートではありませんでしたが、共同研究者からの助言も含めて新学習指導要領実施に向けてとりくむべきことについて共に考える機会を提供することはできたように思います。他にも全国各地から、小学校の外国語活動や教科化、子どもの意欲と理解を促す工夫、平和・環境・人権を主眼としたとりくみなど、参考になるリポートがいくつもありました。中心となる発表協議もさることながら、休み時間に意見や質問、連絡先を交換し、2日の夜には会場近くで交流を深めました。

参考になる多くの実践、本音での熱い意見交流、新しい出会いなど、今後のエネルギーとなるたくさんのお土産をもらって帰ってきました。12年ぶりに全国教研に参加しま

技術・職業教育

すでに「STEAM教育」をしていた我が「職業教育」

司会者・佐藤新太郎（宇佐産業科学）

21世紀型の新しい教育「STEAM教育」が世界各国で導入され始めています。STEAMとはS: Science、T: Technology、E: Engineering、A: Art、M: Mathematics、それぞれの頭文字を取った言葉です。その「STEAM教

育」は、子どものうちからロボットやIT技術に触れて「自分で学ぶ力」を養う新しい時代の教育方法といえます。日本は遅れていますが、アメリカや新興国では何年も前から導入され国主導の教育カリキュラムとして実践されています。

これまでの「先生が教え、生徒は覚える」スタイルの学びでは、人工知能(AI)を使いこなせる人材には育ちません。新たな時代に必要とされる自発性、創造性、判断力、問題解決力、オプティズム(何度でも挑戦する)力、コラボレーション力、コミュニケーション力、倫理的配慮力等を養うとされるのが「STEAM教育」です。

そういえば、我が「職業教育」は既に「STEAM教育」そのものといってよく、専門高校の教員はもっと自信を持って良いと思います。

今年度は司会者として参加した全国教研でした。しかし、司会をしながらレポートを3本も発表する出番がありました。終わり際に共同研究者の大学教授から「来年も『プレイングマネージャー』で頼むよ!」とお言葉を頂戴しました。来年は仲間を連れていきたいです。募集します。

インクルーシブ教育

「誰もが受け入れられる教室を」

一般参加・緒方 里美(別府鶴見丘)

今回の分科会に参加するまで、インクルーシブ教育がどんな教育をめざすものなのかわかっていませんでした。各都道府県の代表の方々のレポートを読み、発表を聞いて、働く場所が違って、抱えている問題や悩みは同じなのだと感じました。会場には、障害者の方が来られていました。実際に、障害の程度が重いからという理由で学校に通わせてもらえなかった人たちの話を聞くことができました。「学校に行きたい」という本人の意思が尊重されない事実があることに、とてもショックを受けました。教員一人ひとりの認識を変えていかなければならず、学校に行きたい子どもをこちらが拒否することはあってはならないことだと感じました。高校現場にいと、なかなか実感のわかないものでしたので、参加できてよかったです。

自治的諸活動と生活指導

「驚き、刺激を受け交流」

リポーター・山田 憲昭(日田三隈)

リポーターが37人(小学校17人、中学校14人、高校6人)と多人数の話し合いです。10分の発表後、質問が的確で、意見も濃く交流ができました。

大阪市立のある中学校夜間学級(大阪は夜中が4つ)では、70~80歳代の女性たちがリードし、授業中に「わからない」「おしえてください」はふつうに飛び交い「恥ずか

しがることがない」と言われました。初日の終了後、お声をかけて、交渉の場に生徒がいることを伺いました。岩手高から報告のあった「相談室通信」では、19回中16回はスマートフォン依存症を扱い、心理学の分析の大切さを言われています。

共同研究者の子どもの人権連の平野裕二さんは、子どもの権利条約の「意見を言う権利」について、子どもと対話や説明をし、「説明ができないことは押し付けない」と言われます。不満を出せる、対応する、きちんと聞いて、「支える」と説明されました。また、今年20年目で退かれる石井小夜子弁護士や林大介教授とも、直接話をさせていただきました。

平和教育

「軍国主義は国民の不断の努力の放棄が生むもの」

リポーター・佐藤 立也(日出総合)

「軍国主義は国民の不断の努力の放棄が生むもの」平和の対極は単に戦争だとする固定的な平和教育にあらず。普通に皆で食事ができることや普通に遊べるという、日常を普通に安心して生活・活動ができるようにする環境づくりが平和教育の役割です。「普通」の中で他の意見に振り回されることなく、自分自身の考えで判断・行動できる自己肯定感をつくっていくのが人権教育ではないでしょうか。10分間という限られた時間の中での報告は困難を極めました。会に参加する中で、いくつかの危機感を感じました。震災・原発事故が今や歴史の授業(過去のもの)となりつつあるのではないかと。米軍基地の多い沖縄からの報告では、イランの米軍への攻撃の時に、その後の有事に備えるための職員集合がかかり、緊張が走った様子が語られました。まさに戦時中。学力向上の名の下に犠牲にしてきた大切な教育を、もう一度確認する必要があると感じました。

メディア・リテラシー教育と文化活動

「人と人をつなぐ場の1つでありたい」

リポーター・青木 美穂(佐伯鶴城)

第19分科会のうち、第1小分科会「情報教育・学校図書館教育」に参加しました。プログラミング教育に関する報告、ICT機器を活用した授業の取り組み、学校図書館でのとりくみなど多様で興味深い実践報告がありました。

初めての参加で緊張していましたが、情報教育と学校図書館教育と文化活動と、それぞれ細かく言えば専門外の話も、互いに真剣に聴き、自分の立場と結びつけながら質疑や意見を交わし、情報共有が行われている様子に安心しました。また、最後

の総括討論で話題になった「人と人がつながる」ことに重点を置いて今回の3つの視点を考えて時、読書活動や文化活動が人と人をつなぐものであり、ICT機器はそのツールであるという意見が心に残っています。私たちはそれらをどのように活用することで子どもたちの豊かな学びに繋げていけるか、考えていく必要があります。

学校司書の立場としては、複数の学校図書館から聞いていて次から次へとアイデアが浮かんでくるような面白いとりくみを聞くことができ満足です。自校はもちろん学校司書部に持ち帰り、今後の発展につなげて行きたいと思えます。

高等教育・進路保障と労働教育

「Society5.0の前に」

司会者・濱田眞一郎（新生支援）

全体会でのサヘル・ローズさんの講演に深く胸を打たれました。子どもたちの学ぶ権利の保障が主な論点であるこの分科会としても、自分たちの立ち位置がどこにあるかを改めて確認することができました。外国にルーツを持つ子どもたちの学ぶ権利をどう保障するかは、本県でも課題として認識されてからかなりの年数を経過しました。入試における配慮などは既になされているものの、そこまでです。今後の重点課題とすべきでしょう。

「労働教育」では、「求められる人材」といった、企業側の思惑に沿う、いわゆる「キャリア教育」の実践報告が義務制からなされるのに対し、就職試験での違反質問に、子どもたちがどう立ち向かったか、ワークルールを学ぶ授業をどう構築したかといった「労働教育」の実践報告は高校からという対比が際立っていました。非正規雇用の拡大、人材の流動化を狙った時代の「キャリア教育」は、深刻な人手不足や、非正規雇用増大がもたらす社会不安を前に、既に陳腐化していると言ってよく、社会との接続を目前に控えている高校現場のそうした危機感、問題意識はもっと共有されて良いと思えます。

漠然とした不安につけ込む形で、教育ビジネスが学校教育を侵食するようになって久しいですが、eポートフォリオ、民間テストの活用など、行きつく先はどこになるのでしょうか。かつては産業界の要請が教育を歪めると言っ

きたものですが、内実は私たち教職員の手で守られてきました。ところが今日のありようは、日々の実践を根本からビジネスに売り渡すに等しく、同時にビジネスにならない個別具体の課題は教育現場の中心課題から一層疎外され深刻化しています。この課題は今回の議論の中でも明確になりました。

当然、これらの課題はSociety5.0として描かれている未来と地続きです。この先にあるのは、そうとは気づかない中で、人としての様々な権利が搾取され、切り売りされ、分断や差別が進む世界に他なりません。

もはやこの流れは誰にも止められないのかもしれないかもしれません。ただ、学ぶ空間や時間が権利として保障された子どもたちが、自身の力で壁を越え、関係を結びあいながら成長していくといった、いくつかの実践報告には、やはり力強い希望を感じさせられました。そんな実践を1つでも多く積み上げていくことができたらと強く思います。

教育条件整備の運動

「全国教研に初めて参加しました。」

リポーター・田畑 幸子（別府支援石垣原）

この分科会には、20本のレポートが報告されました。報告者の3分の2ほどが市町村立の小・中学校の事務職員で、3分の1ほどが教諭等でした。

報告を聞いて、事務職員の方々の苦勞、職員室への不満の声がわかりました。今までも困ったら事務に相談していましたが、今後はもっと相談して解決策を探し出そうと思いました。市町村立と県立の違いはあるのだとしても、どこも予算がないことは同じだと実感しました。

共同研究者の方（事務）が、「事務職員も学習指導要領を読んでください。学校運営をするに当たって必要なことが書いてあります。先生方が理解できてないと言うだけでなく、一緒に考えていき子どもたちが安全に学習できるように協力していくべきです。」というような内容を話してくれました。学校で働いている人全員で運営していることを改めて確認させられました。もう一度、学習指導要領を読んでみようと思いました。

特別分科会「せんせい、あのね～『子どもが安心して学べる学校』への働き方改革～」



最初に行われた、パネルトーク「今の学校をどう思う？」では、神本美恵子さん（前参議院議員・元小学校教員）と教員志望の大学生が意見を交わしました。その後、内田良さん（名古屋大学）が「学校をカエル！ 子どもと先生の安全・安心をもとめて」と講演されました。最後にはパネルディスカッション「学校を子どもが安心して学べる場に行い、保護者、教職員、大学生、神本さん、内田さんが子どものためにも働き方改革を協力してすすめていく重要性について述べました。」